

# 令和 7 年度 園評価書

園番号 29 園名 用宗こども園

## I 経営の重点に関わること

評価段階 (A : よくできている B : 概ねできている、C : あまりできていない、D : できていない)

1 教育・保育目標	2 重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)
心も体も元気な子	自分で考え やってみよう ～いいねが いっぱい～	自分の好きな遊びを見つけて夢中になってあそびを楽しむ	子どもたちの興味・発達に合わせた環境についての共有や、遊びだしの環境の見直しをしていくことで、子どもたちは自分の好きな遊びを見つけ「また続きをやりたい」と夢中になって遊ぶ姿が見られるようになった。まだ遊びが途切れる子や保育者にスキンシップを求める子もいるが、保育者が一緒になって遊び一人一人に寄り添うことで遊びに入り出す場を作っていく	B	A	・子どもたちが自分の好きな遊びを見つけ、笑顔で夢中になっている姿が見られた ・様々な遊びができるように素材や道具が工夫されており、子どもたちも考えながら遊んでいる姿が見られた	・各学年月1回のエピソード会議で「もっとやりたい」「ためしたい」を引き出す環境について、多角面から振り返り、保育に活かしていく ・保育者も子どもの好奇心を捉え、一緒に探求していく
		いろいろなことに興味関心をもち、「なんだろう?」「どうしてかな?」と考え、試したり工夫したりする	子どもたちは遊びの中で問いをもち、考えたり試したりしながら遊びを広げようとしている。保育者は様々な素材を用意したり、すぐに答えを出さずに見守り、思いを引き出す関わりをしている。一方「なぜだろう」の問いはもつが工夫するまでの探求が少ないところもあるため、今後も保育者は興味関心が薄れないうちに環境を整えるようにしていきたい	B	B	・個々の気持ちや言葉を遊びの中に取り入れていて、子どもたちがのびのび元気いっぱい遊ぶ姿がみられた	・少人数の園の強みを活かし、異年齢や様々な職員との関わりを深め、思いを伝え合いながら、遊びを広げていく ・打ち合わせで活動内容を共有し、計画的に異年齢活動を取り入れる
		自分の好きな遊びを楽しむ中で、気づきや面白さを見つけ、保育者や友だちに伝えようとする	保育者が子どもたちの一人ひとりの思いを言葉やしぐさから応答的に受け止め、安心できる存在となるように関わることで、子どもたちは気づきや面白さを積極的に伝える姿が増えた。少人数の園の強みを活かし、伝え合いの援助をしていったことで、園の様々な職員や異年齢児にも伝えようとする姿が見られた	A	A		

## II 各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	各学年の発達を捉え、学年目標に向けて保育を行っている	園のグランドデザインに基づいた学年目標に向けて、各クラスが子どもたちの発達を捉えながら保育を行っている。公開保育やエピソード会議にて、保育者が願う育てたい姿の捉え方や昨年からの経験している遊びの経験に連続性をもたせていった。	A	A	・保護者がA評価をつけていることが多いことから、子どもたちもよく遊んでいると思う	・エピソード会議や公開保育で、教育課程を有効に使う
	(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	個々の生活リズムを大切に、安心して生活できるように配慮し、早番、遅番保育の改善に取り組む	個々の生活リズムや体調に配慮しながら、必要に応じて活動を変更するなど無理なく過ごせるようにした。家庭からの連絡事項も職員間で共有し、継続的に子どもの様子を把握できるようにしていった。途中入所児童が増えたことで、遅早番、土曜保育等の乳児の人数増加や支援児対応が増え、玩具の見直しや保育室を分ける等必要に応じて配慮していった。	B	B	・園の職員が子どもに対し、優しく接することができている	・低月齢児早番増加に伴う人員確保と室内環境の見直しを行う ・各クラスの伝達ファイルを通し、早遅番の伝達事項を確実に伝え合う
	(3)環境を通して行う教育及び保育	散歩マップを活用しながら、地域へ散歩に出掛ける。また、直接体験を通し、地域の自然を保育に活かすことができるよう取り組む	散歩マップをもとに地域の豊富な自然物や人との出会いを大切に保育に取り入れている。直接体験を通し、子どもたちが遊びに必要なものを考え、シーグラスや石、まつぼっくりやどんぐりなど遊びに取り入れていった。散歩マップをリニューアルしたが、来年度は広く周知するべく掲示場所を考えていきたい。	B	A	・散歩マップ等は何か案内表示があると良いのではないか	・散歩マップを広く保護者にも共有をし、直接体験を通し、地域の自然を保育にいかしていく
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	様々な訓練に柔軟に対応し、保護者にも発信することで、安全意識を高める。また、ヒヤリハットや安全マップを通し、職員間で安全対策や事故防止に努める	様々な想定をもとに訓練を実施し、また引き渡し訓練を屋上で行うなど保護者にもより周知できた。後半は、減災教育を受けこれまでの知識や概念を書き換えることができ、子どもたちとともに考える訓練を実施した。ヒヤリハットは、その都度報告し事故防止への意識づけや職員間の共有ができた。危険箇所マップの作成が完了し、園外での安全意識をもつようになっていった。	A	A	・海に近いこともあり、防災教育等にもしっかりと力を入れ、子どもたちや保護者にも教えられていて良い・食育を子どもたちに伝えることは良い取り組みだと思う	・減災教育の概念をもとに、考える訓練の実施に向けた年間計画の見直しをしていく ・ヒヤリハットはその都度共有する上で、四季を捉えて傾向をつかめるように振り返り、未然に防げるようにする
3 保健管理・指導	(1)健康教育の充実	季節の野菜を育てる栽培活動や、見る触る等の五感を刺激する食育集会を実施し、その内容や様子を保護者にも発信し、食への関心につなげている	夏野菜や冬野菜の栽培・収穫、クッキングを通して食育に関心をもつことができた。一方で子どもたちは水やりをしても、気温の影響で収穫が難しい物もあったため、育ちやすい野菜の選び方も意識していきたい。食育集会や栽培の様子をおたよりやギャラリーに写真展示し、保護者の方にも共有していくことで食への関心が高まった。	A	A		・塩害もある地域なので育ちやすい野菜の飼育栽培も検討しながら、五感を刺激する食育集会の実施と保護者への発信を行っていく
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	支援者会議で課題を共有したり、支援児の会(しらすっこ)を行うことで、保育の充実を図る。また、職員会議にて全職員に発信し、共通理解をしている	支援児の会「しらすっこ」は昨年度より回数を増やし、支援児の自信につながるよう活動内容を工夫して行っていた。支援者会議では「しらすっこ」の振り返りや日頃の保育の悩みを発言しやすい機会をもったことで、支援方法が広がった。また毎月のケース会議を職員会議内で行うことで、支援児について全職員が共通理解できた。	B	B	・特別支援についての全体の保護者への理解を進めていくことの難しさや大切さを学校でも感じている	・支援児の増加を元に、しらすっこの内容を支援児の発達に合わせて行う。また支援方法の幅を広げ職員の資質向上を図る
5 組織運営	(1)組織体制の充実	各分掌は責任をもって取り組むともに、全職員が共通理解をし、協力しながら教育保育を進める	各分掌担当がたてた企画案を前の月の職員会議で共有し、全職員が把握することで、スムーズに協力しながら準備実施している。また、分掌毎に成果・課題を出し、来年度に繋げられるよう職員会議で共有していった。負担軽減のため、複数で分掌を担当し仕事内容を分散しているが、今後も協力しあい変更点等その都度話し合いをもち進めていきたい。	B	B	・職員同士のコミュニケーションや連携を日頃から考えていることがとても良いと思う	・企画を前もって全体共有することに努め、分掌リーダーを中心に他の分掌も協力しあい行事の計画を進行していく
6 研修	(1)研修体制の充実	公開保育や園内研修でのエピソード会議を通し、日々の保育を振り返り、その学びを保育に活かすことで重点目標や研修テーマの実現につなげている	公開保育やエピソード会議では全職員が参加し、各クラスの保育について多角面から意見を出し合うことで遊び環境や関わりを振り返り、保育に活かすPDCAサイクルができた。職員の研修テーマや日々の手だてへの意識も高まっている。子ども理解について内面の捉えにまだ課題が残っているが、エピソード会議の書式を改善したことでより深く考えあう場を持っている。	B	B		・エピソード会議や公開保育の事後研の内容を適宜改善し、保育力向上に繋げる ・エピソード会議や園内研修では、小グループ等で参加する職員が話しやすい環境を作る
7 教育・保育環境整備	(1)教育・保育環境の充実	自ら思いや願いをもち、遊びに必要な玩具や自由度のある素材との出会いを大切に「やってみよう」と心動かす保育環境を作る	保育者は、子どもたちの姿から願いを持ち遊びを展開できるよう、様々な素材や自然物、自由度のある可動遊具(コンテナ・パネル・お風呂マット等)を保育に取り入れていった。担任間、園内研修や乳・幼児会議で環境について話し合うことで広い園庭や各保育室の環境が充実してきた。遊び出しの環境を整えることで遊びが続くようになったが広がりにくい課題があり、エピソード会議で子ども理解に重点を置いていきたい。	B	A		・園内研修にて季節に合わせ地域資源の探求を行い、共有する ・月一回幼児・乳児会議で遊び環境の話し合いを行い、職員間で共有していく
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	写真を使ったドキュメンテーションや年2回の面談で、日々の遊びの経過や育ちを保護者にわかりやすく伝え、家庭との連携を深めている	写真を使ったクラス便りを月1回、ドキュメンテーションを幼児組・2歳児は毎日、0、1歳児は毎日の連絡ノートに加え、週1回作成することで、子どもたちの遊びの様子や育ちの姿をわかりやすく伝えることができていく。面談も年2回行うことで、日頃送迎時に会えない保護者にも成長過程を共有する機会となっている。毎日のドキュメンテーションとつなげて送迎時に保護者に話すことで、関心も増えていると感じる。	A	A	・地域の素晴らしさを積極的に活用している様子がわかった。また、人とのつながりを大切にしているところが素晴らしい。小学校でも地域に根ざした教育を進めていきたい	・今後も写真を利用した発信と、送迎時の子ども姿の共有を行っていく ・乳児幼児ともに保護者面談を行い、丁寧に個の育ちを伝え合う場とする
9 近隣の学校との連携	(1)近隣の園との連携の推進	近隣の園や小学校に公開保育を実施し、また小学校の授業参観や交流をしていく中で、自園の教育保育の充実につなげている	自園の公開保育や園見学に小学校の先生が来て下さる機会が増え、園での様子を共有できた。事後研修に参加して頂き、園の教育保育を共有したり、子どもたち同士が交流したりするなど、更なる機会をもちたい。5歳児交流で他園との交流が深まり、大きい集団での活動を経験する貴重な場となっている。ほとんどの職員が他園の公開保育に参加し、自園の保育に生かすことができていく。	A	A	・小学校とのつながりをもつことで、学校側も園を身近に感じる良い機会となっている	・小学校との連携、他園との交流、他園の公開保育への参加を継続する。小学校教諭に公開保育事後研に参加してもらおう等交流を深めていく
10 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	地域との連携を大切に、地域の行事に積極的に参加することで、つながりが深まるようにする	用宗ならではの地域行事にたくさん参加し、交流が深まっている。おしゃべりサロンで未就園児と交流する場を作り、子育て支援が計画的に行われ、昨年度より利用者が増加傾向にあり、入園前に園を知ってもらえる場となっている。しずてつや静岡信用金庫、用宗文化展への絵画の提供、園医や消防、警察等への動労感謝訪問、しらす、磯クラブで地域の高齢者の方々とも交流できている。	A	A		・今後も全学年がバランスよく地域活動に参加し、交流を継続する。 ・新たに園庭開放を行い、地域の子育て家庭のニーズに応えていく